

2020年2月

今年の2月は平年よりも暖かいですね。冷え性の私にとって、暖かいことは思わずうれしく感じてしまいますが、地球温暖化が進んでいるのだろうか複雑に感じてしまいます。

さて、今回ご紹介したいのは猫・犬などペットの飼い方を改めて見つめ直すことができる本『犬と猫と人間と いのちをめぐる旅』飯田基晴著 太郎次郎社エディタス 2010 年です。

あとがきに、サン・テグジュペリの『星の王子さま』に出てくるキツネが言った「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」の言葉について書かれていました。「いのちの大切さ」も、目に見えない「かんじんなこと」だと。私も『星の王子さま』を読んだとき、“一番大切なものは目にみえないのだ”ということばが心に響き、心や命が一番大切なのだろうと考えていたため、この著者に共感し、『犬と猫と人間と いのちをめぐる旅』をご紹介したいと思います。

この本は、稲葉恵子さんという方が、この著者であり映画監督でもある飯田基晴さんに、映画製作費を出資するので犬や猫の映画を依頼するところから始まります。そして、動物愛護関係者などにインタビュー・撮影をするのです。関係者のお話では、衝撃的な場面も出てきます。私が印象的だったことを中心にご紹介したいと思います。

神戸市動物管理センターでは、ボランティアが日常的に出入りしていることもあり、開放的で取材も比較的自由にできたそうです。特に、殺処分に立ち会う場面では、正直この本を読んでいて、息苦しく感じましたし、想像したくないなぁと思ってしまいました。しかし、現実を知ること私たちには何ができるのだろうと、一人でも多くの方が考えることは大切だと感じました。飼い主の都合で命を落としてしまうペットがいることを忘れてはならないです。

また、この映画を依頼した稲葉恵子さんがお世話になった獣医の前川博司先生（日本動物愛護協会の附属動物病院で長らく院長されていた方）のインタビューが心に響きました。“人間が動物をかわいがる気持ちでいるためには、やっぱり平和があって、裕福でなくてはいけない”ということ。著者も述べていますが、平和であることは当然大切なことだが、動物愛護の視点からでも平和がいかに大切であることが再認識できます。人間にとって心の余裕がなければ、ペットをちゃんと飼うことができないのだと改めて感じた言葉です。

